

第1章 食 材

はじめに

一三世紀末に編纂されたラースール朝行政文書集『知識の光』には、宮廷で用いられたと見られる食材への言及が散見する。そのうち、用途や年月日が明示されることが多い食材の調達命令書 (*sūṭā, mustadā*) や消費記録などの「宮廷への食材供給記録」に記載された食材は、その他の記事群中の食材と比べて、実際に宮廷で用いられた可能性が相対的に高いものと考えられる。本章では「宮廷への食材供給記録」中の食材を一覧にして提示し、周辺史料との比較を通してその多様性や傾向、使用機会について検討する。さらには、複数のアデン港課税品目録をもとにインド洋交易による輸入品の確定を行い、各種地理書の記事と合わせて考えることで、アデンの「後背地」がインド洋周縁部に広く点在していたことを詳らかにする。

従前の研究を踏まえれば、ラースール朝の宮廷食材がインド洋交易の影響を直接的に受けたものであった可能性が想定される。ラースール朝がインド洋交易と密接につながっていたことは、一三一一四世紀の旅行家マルコ・ポーロ (Marco Polo) (d. 1324) が、アデンのスルタン (ラースール朝スルタン) を指して、「彼が世界で最も富裕な王者の一人であり得るのは、まさに右に述べた理由、すなわちその国にやってくる商人に賦課した重税のおかげなのである」¹

と述べていることから窺い知れる。この記述は、ラスール朝下イエメンがインド洋交易において重要な位置を占めており、西はモロッコから東は中国へ至る諸地域の産物が、支配下のアデン港を中継し、往来していたことを間接的に示す²。当然のことながらこれらの産物はラスール朝下を素通りするだけでなく、イエメンにおいても輸入、使用されていたものと考えられる。しかしながら先行研究は、海上交易の形態や携わっていた商人、貿易ルート、アデン港における税関業務に着目するばかりで、交易品の実際の用途に対しては関心を払っていない。本章の考察は、ラスール朝の宮廷食材の多様性を描き出すと同時に、海を渡った産物がイエメンで実際に用いられていたこと、すなわちラスール朝が世界大のネットワークの一部であったことを、具体的に明らかにするものである。

1 「宮廷への食材供給記録」と宮廷食材の傾向

(1) 「宮廷への食材供給記録」

『知識の光』中には、「宮廷への食材供給記録」とみなすことができる記事は約六〇点見られる³。以下はその一例で、スルタンがある年のラマダーン月にタイツズ所在の迎賓館 (Majlis) で催した宴席において、下賜あるいは消費された食材の詳細を記録したものである。「宮廷への食材供給記録」は、多様な行政文書より構成されているため各記事間にいくらかの差異が見られるもの、おおむね左記引用のような体裁をとっている。

庇護されたるタイツズの城砦の迎賓館における聖なる宴席のために、ラマダーン月の日々において、いと高き幸運への賞賛に費されたものに関する諸紙片

手当て(註三)用に生じたところのもの——(中略)レンズマメ…一ザバデー、白砂糖…六ラトル、米…十二分の一ザバデー、ヒヨコマメ…四分の一(中略)

砂糖菓子(註四)の館(Bay at-Tawa)用——白砂糖…一五、蜂蜜…一五、アーモンド…四ラトル、ヘイゼルナッツ…四ラトル、ゴマ油…一六(後略)

このように、まず冒頭に、その記事の内容を表す題名ならびに状況説明文が書かれる。次に、記載される食材の用途が示され、その後、個々の食材名や量、価格が列挙されていく。

この「宮廷への食材供給記録」のうち、最も古い記事は六四四／一二四六―七年のものであり、最も新しい記事は六九四／一二九四―五年の状況を記したものであった。⁵したがって「宮廷への食材供給記録」には、一三世紀中頃から末における、宮廷食材の状況が反映されているとすることができる。

もっとも序章において既述したように、これらはその編者すら不明な断片的な記録の集成であって、記録間の相互性も薄い。また、宮廷で使用された食材を網羅的に記載しているというわけではなく、一種の規範として編纂されたものと見られる。しかし、周辺史料との比較を通じて、その記事内容を吟味・検討することで、十分な情報を提供する史料であると考ええる。

(2) 宮廷食材の傾向

「宮廷への食材供給記録」記載の食材の種類数は、九四点にのぼる。また同記録中には他にも、厨房(matbakh)や日常生活で使用されたと見られる雑貨類や用具類に関する記事も含まれる。これらの食材や雑貨類、用具類を、一五種類に分類・整理したものが、表1である。⁶